

梵文和訳『阿毘達磨集論』(4)

阿毘達磨集論研究会

研究会代表者	那須良彦（社会福祉法人金剛樹心会理事長）		
研究会メンバー	加納和雄（駒沢大学准教授）	李 学竹（中国蔵学研究中心宗教研究所教授）	
	吉田 哲（龍谷大学准教授）	松下俊英（大谷大学非常勤講師）	
	早島 慧（龍谷大学講師）	横山 剛（日本学術振興会特別研究員）	
	高務祐輝（京都大学非常勤講師）	間中 充（龍谷大学非常勤講師）	
	吹田隆徳（佛教大学大学院生）	田中裕成（佛教大学大学院生）	
	奥野自然（龍谷大学大学院生）	中山慧輝（日本学術振興会特別研究員 DC2）	

はじめに

本稿は、阿毘達磨集論研究会[2018]の続編であり、『阿毘達磨集論』(*Abhidharmasamuccaya*)とその注釈『阿毘達磨集論釈』(*Abhidharmasamuccayabhāṣya*)の梵文テキストを再校訂し、その和訳を試みるものである。前稿と同様に両論書の和文完訳が未刊行である点、および、新たに確認された『阿毘達磨集論』(*Abhidharmasamuccayavyākhyā*)の梵文写本の読みを踏まえた梵文の再検討が必要である点、主にこの二点を理由に、その梵本再校訂と和訳を目指す。

本稿に収録する部分は、第一篇「本事分」の第一章「三法」中の「建立」における、「行蘊建立」の一部である。「行蘊建立」は、心所法を列挙し、それぞれを「特徴」(*lakṣaṇa*)と「作用」(*karman*)の二点から定義する。本稿が収めるのは、心所法中の随煩惱・不定の箇所に対応する。この箇所は随煩惱それぞれの「特徴」と「作用」を説き、さらに散乱を六つに分類し解説する。そして、不定それぞれの「特徴」と「作用」を説く。

研究会では、代表者である那須良彦が下訳と注を準備し、加納和雄をはじめとする班員がそれを検討するという仕方で作業を進めた。梵文原典の校訂は、李学竹の全面的な協力によりなされた。

校訂と訳について

本稿で提示する『阿毘達磨集論』の梵文校訂テキスト（暫定版）は、ゴーカレーの刊本およびその原本たる梵文写本（写本影印 Göttingen Xc 14/23–24 (a) を使用）と、梵文『阿毘達磨雜集論』から回収される対応箇所（Li [2016] 所掲梵本翻刻）とを対校したものである。ブラダンによる還梵テキストは参照するに留めた。また、『阿毘達磨集論釈』も同様に、クティアの刊本およびその原本たる梵文写本（写本影印 Göttingen Xc 14/23–24 (b) を使用）と、梵文『阿毘達磨雜集論』から回収される対応箇所（Li [2016] 所掲梵本翻刻）とを対校した校訂テキストを提示した。

本稿の校訂テキストにおいて、異読や訂正は適宜注記したが、写本特有の綴り字や連声の標準化、アヴァグラハの追加、および分節の添削については煩を避けるため逐一報告しない。『阿毘達磨集論釈』において太字で示した箇所は、『阿毘達磨集論』の本文を指す。

訳語に関して、個別の法の名称は術語（テクニカルターム）として理解して伝統的な漢訳（主に玄奘の訳語）を充て、それ以外は、現代表現（とくに和語）を用いた。そして必要に応じて、現代表現に対応する伝統的漢訳表現を丸括弧で補った。

本稿で提示するテキストには諸法の定義が列挙され、それぞれの定義にはアビダルマや唯識の諸文献において各々対応する箇所が存在する。本来ならばその対応箇所を逐一報告する必要があるが、その作業はすでに『瑜伽行派の五位百法』をはじめとするバウッダコーシャシリーズにおいて網羅的になされている。そのため、本稿においては、作業の重複を避け、バウッダコーシャの該当箇所への言及によって、それに代えた。なお、『五蘊論』安慧釈（PSkV）の梵文については、『瑜伽行派の五位百法』以後に出版されたため、該当箇所のみを適宜示す。

凡例

本稿では梵文テキストと和訳を見開きで提示する。提示する梵文テキスト並びにその中で使用した記号は、Li and Kano [2014]、Li [2015] [2016] の提示する校訂テキストに従う。三角 △ は、梵文写本における改行位置を示す。

科段

- 1.1.5.1.4.1.31 忿
- 1.1.5.1.4.1.32 恨
- 1.1.5.1.4.1.33 覆
- 1.1.5.1.4.1.34 恼
- 1.1.5.1.4.1.35 嫉
- 1.1.5.1.4.1.36 慳
- 1.1.5.1.4.1.37 誑
- 1.1.5.1.4.1.38 諂
- 1.1.5.1.4.1.39 僞
- 1.1.5.1.4.1.40 害
- 1.1.5.1.4.1.41 無慚
- 1.1.5.1.4.1.42 無愧
- 1.1.5.1.4.1.43 昏沈
- 1.1.5.1.4.1.44 掉挙
- 1.1.5.1.4.1.45 不信
- 1.1.5.1.4.1.46 懈怠
- 1.1.5.1.4.1.47 放逸
- 1.1.5.1.4.1.48 忘念
- 1.1.5.1.4.1.49 不正知
- 1.1.5.1.4.1.50 散乱
- 1.1.5.1.4.1.50.1 自性散乱
- 1.1.5.1.4.1.50.2 外的散乱
- 1.1.5.1.4.1.50.3 内的散乱
- 1.1.5.1.4.1.50.4 因相散乱
- 1.1.5.1.4.1.50.5 麁重散乱
- 1.1.5.1.4.1.50.6 作意散乱
- 1.1.5.1.4.1.50.7 散乱の作用
- 1.1.5.1.4.1.51 睡眠
- 1.1.5.1.4.1.52 惡作
- 1.1.5.1.4.1.53 尋
- 1.1.5.1.4.1.54 伺
- 1.1.5.1.4.1.55 尋・伺の作用
- 1.1.5.1.4.1.56 善なる諸法・煩惱・随煩惱の作用

1.1.5.1.4.1.31 忿

【AS】 AS-Ms 4r6–7 (Gokhale 17.14–15) , ASVy-Ms 14v2–3 (Li [2016: 226.4–5]) , cf. 早島 58.

krodhaḥ katamaḥ. pratyupasthite⁽¹⁾ 'pakāranimitte pratighāṃśikaś⁽²⁾ cetasa āghātaḥ.
śāstrādānadaṇḍādānādi⁽³⁾-saṃrambhasaṃniśrayadānakarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 9r3 (Tatia 7.13–14) , ASVy-Ms 14v3 (Li [2016: 226.6]) , cf. 早島 59.

krodhādayaḥ prajñaptisanto veditavyāḥ, pratighātādi⁽⁴⁾-vyatirekeṇābhāvāt.

1.1.5.1.4.1.32 恨

【AS】 AS-Ms 4r7 (Gokhale 17.15–16) , ASVy-Ms 14v4 (Li [2016: 226.7–8]) , cf. 早島 58.

upanāhaḥ katamaḥ. tata ūrdhvam⁽⁵⁾ pratighāṃśika eva vairāśayasyānutsargaḥ.⁽⁶⁾
akṣāntisaṃniśrayadānakarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 9r3 (Tatia 7.14) , ASVy-Ms 14v4 (Li [2016: 226.9]) , cf. 早島 59.

tadūrdhvam⁽⁷⁾ iti krodhād ūrdhvam.⁽⁸⁾ **akṣāntir** apakārāmarṣaṇam.

(1) pratyupasthite] AS-Ms Gokhale, pratyupāsthite ASVy-Ms.

(2) pratighāṃśikaś] ASVy-Ms Gokhale, prati /// (4r7)śikaś AS-Ms (写本の破損により一文字分欠損) .

(3) śāstrādānadaṇḍādānādi] em. (= Gokhale), śāstrādānadaṇḍādānādi AS-Ms, daṇḍādānaśāstrādānādi ASVy-Ms.

(4) pratighātādi] AS-Ms, prati[ghātā]di ASVy-Ms.

(5) tata ūrdhvam] AS-Ms Gokhale Pradhan, tadūrddham ASVy-Ms.

(6) -syānutsargaḥ] AS-Ms Pradhan, -syānutsarggaḥ ASVy-Ms, -syā 'nutsargaḥ Gokhale.

(7) tadūrdhvam] ASBh-Ms Tatia, tadūrddham ASVy-Ms. Cf. AS-Ms: tata ūrdhvam.

(8) ūrdhvam] ASBh-Ms Tatia, ūrddham ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.31 忿

【問】忿とは何か。【答】損害をもたらす原因が目の前にあるときに心が怒ることであり⁽⁹⁾、瞋 (pratigha) の一部である。〔そして、〕剣を執ることや仗を執ることなどに至らしめる憤激によりどころを提供する作用をもつ⁽¹⁰⁾。

忿などは〔単なる〕名称上の存在（仮設有）であると理解されるべきである。瞋などとは別に存在しないからである⁽¹¹⁾。

1.1.5.1.4.1.32 恨

【問】恨とは何か。【答】それ（忿）の後に敵意を放棄できないことであって、瞋の一部に他ならない。〔そして、〕忍耐できないことによりどころを提供する作用をもつ⁽¹²⁾。

「その後に」とは、「忿の後に」である。「忍耐できないこと」とは、損害に対して堪忍できないことである。

⁽⁹⁾ pratyupasthite 'pakāranimitte を、チベット語訳を参考に絶対処格として訳した。一方、漢訳は目的語として理解しており、その場合は「目の前にある、損害をもたらす原因に対する心の怒りであり」という訳になる。

⁽¹⁰⁾ 他の論書における忿の定義については、BK-I 119–120、BK-II 109–111、BK-III 156–157、BK-IV 172–174、BK-V なし、BK-VI 85–86、PSkV 64–65 参照。

⁽¹¹⁾ 「忿など」とは、これ以降に解説される随煩惱法を指し、「瞋など」とは貪、瞋、痴を指す。その関係性については資料 1 を参照。

⁽¹²⁾ 他の論書における恨の定義については、BK-I 138–139、BK-II 112–114、BK-III 179–180、BK-IV 201–203、BK-V なし、BK-VI 96、PSkV 65 参照。

1.1.5.1.4.1.33 覆

【AS】 AS-Ms 4r7–v1 (Gokhale 17.16–17) , ASVy-Ms 14v4–5 (Li [2016: 226.10–11]) , cf. 早島 60.
 mrakṣaḥ katamaḥ. samyakcoditasya mohāṃśikāvyad_△apracchādanā.⁽¹³⁾ kaukr̥tyāsparsā-
 vihārasaṃniśrayadānakarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 9r3–4 (Tatia 7.15–16) , ASVy-Ms 14v5–6 (Li [2016: 226.12]) , cf. 早島 61.
 dharmmataiṣā yad **avadyaṃ praticchādayataḥ**⁽¹⁴⁾ kaukr̥tyam, ataś cāsparsāvihāra-
 iti.
_{△△}

1.1.5.1.4.1.34 悩

【AS】 AS-Ms 4v1 (Gokhale 17.17–19) , ASVy-Ms 14v6–15r1 (Li [2016: 226.13–15]) , cf. 早島 60.
 pradāsaḥ katamaḥ. pratighāṃśikaḥ krodhopanāhapūrvāṅgamaś cetasa āghātaḥ. ucca-
 pragāḍhapāruṣyavacanasaṃniśrayadānakarmako 'puṇyaprasavakarmako 'sparsāvihāra-
 karmakaś⁽¹⁵⁾ ca.
_△

【ASBh】 ASBh-Ms 9r4 (Tatia 7.16–17) , ASVy-Ms 15r1 (Li [2016: 226.16]) , cf. 早島 61.
 uccapragāḍhapāruṣyavacanam paramarmaghaṭṭanayogena pratyakṣapravāditā.⁽¹⁶⁾

⁽¹³⁾ -pracchādanā] AS-Ms, -pra{{sthā}}«cchā»dana] ASVy-Ms.

⁽¹⁴⁾ praticchādayataḥ] ASBh-Ms, pracchādayataḥ ASVy-Ms. ASBh-Ms の prati-で意味が通るので ASBh-Ms にしたがったが、AS-Ms と TrBh、PSkV の並行箇所を参照すれば、ASVy-Ms の pra-の可能性もある。

⁽¹⁵⁾ -vihārakarmakaś] AS-Ms, -vihārasaṃniśrayadānakarmakaś ASVy-Ms.

⁽¹⁶⁾ pratyakṣapravāditā] em. ASVy-Tib. (D128b6–7, P157a2: mngon sum du brjod pa), pratyakṣaravāditā ASBh-Ms ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.33 覆

【問】覆（隠蔽）とは何か。【答】正当に批判された者が〔自分の〕過失を覆い隠すことであって、痴の一部である。〔そして、〕後悔（悪作）と不快に過ごすこと（不安穩住）によりどころを提供する作用をもつ⁽¹⁷⁾。

過失を覆い隠す者には後悔が〔生じ〕、そして、これ（後悔）にもとづいて不快に過ごすことが〔生じる〕という、このことは道理（法性）である。

1.1.5.1.4.1.34 悩

【問】悩（憤懣）とは何か。【答】忿と恨を先として心が怒ることであって、瞋の一部である。〔そして、〕声高で激しい粗暴な言葉（麁語）を語るによりどころを提供する作用をもち、非福を引き起こす作用をもち、不快に過ごさせる（不安穩住）作用をもつ⁽¹⁸⁾。

「声高で激しい粗暴な言葉を語ること」とは、他人の急所を突くやり方で、面と向かって〔粗暴な言葉を〕言うことである。

⁽¹⁷⁾ 他の論書における覆の定義については、BK-I 121–122、BK-II 118–120、BK-III 158–160、BK-IV 158–160、BK-V なし、BK-VI 87、PSkV 65 参照。

⁽¹⁸⁾ 他の論書における悩の定義については、BK-I 127–128、BK-II 115–117、BK-III 167–169、BK-IV 185–187、BK-V なし、BK-VI 90、PSkV 65–66 参照。

1.1.5.1.4.1.35 嫉

【AS】 AS-Ms 4v1-2 (Gokhale 17.19-20) , ASVy-Ms 15r1-2 (Li [2016: 226.17-18]) , cf. 早島 60.

īrṣyā katamā. lābhasatkārādhyavasitasya parasampattiviśeṣe dveṣāṃśiko⁽¹⁹⁾
'marṣakṛtaś⁽²⁰⁾ cetaso vyāroṣaḥ. daurmanasyāsparśavihāarakarmikā.

1.1.5.1.4.1.36 慳

【AS】 AS-Ms 4v2 (Gokhale 17.20-21) , ASVy-Ms 15r2 (Li [2016: 226.19-20]) , cf. 早島 60.

mātsaryaṃ katamat. lābhasatkārādhyavasitasya pariṣkāreṣu rāgāṃśikaś cetasa
āgrahaḥ. asaṃlekhasanniśrayadānakarmakam.

【ASBh】 ASBh-Ms 9r4-5 (Tatia 7.17-18) , ASVy-Ms 15r2-3 (Li [2016: 226.21-22]) , cf. 早島 61.

asaṃlekho mātsaryeṇānupayujyamānānām apy upakaraṇānām saṃnicayād veditavyaḥ.

⁽¹⁹⁾ parasampattiviśeṣe dveṣāṃśiko] AS-Ms Gokhale, dveṣāṃśikaparasampattāv ASVy-Ms.

⁽²⁰⁾ 'marṣakṛtaś] ASVy-Ms Gokhale, a/// (4v2)kṛtaś AS-Ms (写本の破損により二文字分欠損) .

1.1.5.1.4.1.35 嫉

【問】嫉とは何か。【答】財産と厚遇に執着している者の心が、他者のある特定の成功 (sāmpatti) に対して、堪忍できずに怒ることであって、瞋の一部である。〔そして、自身を〕憂鬱にさせ不快に過ごさせる (不安穩住) 作用をもつ⁽²¹⁾。

1.1.5.1.4.1.36 慳

【問】慳 (吝嗇) とは何か。【答】財産と厚遇に執着している者の心が、身の回りの物に対して物惜しみすることであって、貪の一部である。〔そして、〕質素でないことによりどこを提提供する作用をもつ⁽²²⁾。

「質素でないこと」とは、慳によって、不必要な資財をも集めるからであると理解されるべきである。

⁽²¹⁾ 他の論書における嫉の定義については、BK-I 125–126、BK-II 133–135、BK-III 164–166、BK-IV 181–184、BK-V なし、BK-VI 89、PSkV 66 参照。また、AS における嫉結の定義については Li [2013: 249.33–37] 参照。

⁽²²⁾ 他の論書における慳の定義については、BK-I 123–124、BK-II 136–138、BK-III 161–163、BK-IV 178–180、BK-V なし、BK-VI 88、PSkV 66 参照。

1.1.5.1.4.1.37 誑

【AS】 AS-Ms 4v2 (Gokhale 17.21–23) , ASVy-Ms 15r3–4 (Li [2016: 227.1–2]) , cf. 早島 60.

Vy 15r4 māyā katamā. lābhasatkārādhyavasitasya rāgamohāṃśikābhūtaguṇasaṃdarśanā.
mithyājīvasaṃniśrayadānakarmikā.⁽²³⁾

1.1.5.1.4.1.38 諂

【AS】 AS-Ms 4v2–3 (Gokhale 17.23–24) , ASVy-Ms 15r4 (Li [2016: 227.3–4]) , cf. 早島 60.

AS 4v3 śāṭhyaṃ katamat.⁽²⁴⁾ lābhasatkārādhyavasitasya⁽²⁵⁾ rāgamohāṃśikā bhūtadoṣa-
vimalanā.⁽²⁶⁾ samyagavavādalābhaparipanthakarmakam.⁽²⁷⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 9r5–v1 (Tatia 7.18–20) , ASVy-Ms 15r5 (Li [2016: 227.5–6]) , cf. 早島 61.

Vy 15r5 bhūtadoṣavimalanānyenānyasya⁽²⁸⁾ pratisaraṇaṃ⁽²⁹⁾ veditavyam. samyag-
avavādalābhaparipanthakarmakatvaṃ yathābhūtam ātmānam⁽³⁰⁾ anāviṣkṛtyā-
vavādāyogyatvāt.

⁽²³⁾ -saṃniśrayadānakarmikā] AS-Ms Gokhale, -saṃniśrayakarmikā ASVy-Ms.

⁽²⁴⁾ katamat] ASVy-Ms Gokhale, ka /// (4v3) AS-Ms (写本の破損により三文字分欠損) .

⁽²⁵⁾ -adhyavasitasya] AS-Ms Gokhale, -adhyavasitasyaiva ASVy-Ms.

⁽²⁶⁾ -vimalanā] ASVy-Ms, -vimālanā AS-Ms Gokhale.

⁽²⁷⁾ -lābhaparipanthakarmakam] ASVy-Ms, -lābhalābhaparipanthakaram AS-Ms, -lābhaparipanthakaram Gokhale. Cf. TrBh 94: samyagavavādalābhaparipanthakarmakam, PSkV 77: samyagavavādalābhaparipanthakarmakam.

ASVy の読みが、他の箇所との整合性がとれるため採用したが、Gokhale の読みがオリジナルであった可能性もある。

⁽²⁸⁾ -vimalanānyenānyasya] ASVy-Ms, -vimālanā anyenānyasya ASBh-Ms Tatia.

⁽²⁹⁾ pratisaraṇaṃ] AS-Ms ASVy-Ms Tatia. Cf. Tib. (bsgyur bar), Ch. (避).

⁽³⁰⁾ yathābhūtam ātmānam] ASBh-Ms Tatia, ātmānaṃ yathābhūtam ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.37 誑

【問】誑（欺瞞）とは何か。【答】財産と厚遇に執着している者が、実際にはありもしない徳性⁽³¹⁾を〔偽装して〕示すことであって、〔それは〕貪と痴の一部である。〔そして、〕不正に生計を立てること（邪命）によりどこかを提供する作用をもつ⁽³²⁾。

1.1.5.1.4.1.38 諂

【問】諂（はぐらかすこと）とは何か。【答】財産と厚遇に執着している者が、実際にはあるはずの過失を隠すこと⁽³³⁾であって⁽³⁴⁾、〔それは〕貪と痴の一部である。〔そして、〕正しい教示を得ることを妨げる作用をもつ⁽³⁵⁾。

「実際にはあるはずの過失を隠すこと」とは、〔無関係な〕あることを別なことですり替え〔て、はぐらかすこと⁽³⁶⁾〕であると理解されるべきである。「正しい教示を得ることを妨げる作用をもつ」とは、ありのままに自己をさらけ出すことなくしては、教示〔を受ける〕に相応しくないからである。

(31) abhūtaguṇa を同格限定合成語として理解したが、格限定合成語として理解すれば「実際にはありもしないことについての徳性」とも理解できる。

(32) 他の論書における誑の定義については、BK-I 131–132、BK-II 121–123、BK-III 170–173、BK-IV 192–194、BK-V なし、BK-VI 92、PSkV 67 参照。

(33) bhūtadoṣa を同格限定合成語として理解したが、格限定合成語として理解すれば「実際にはあることについての過失」とも理解できる。また、vimalanā については検討を要する。辞書には確認できず、vimala-nā であるのか、vi-malana であるのかも不明である。ここでは漢訳の「隠」を参照してこのように訳した。一方、チベット語訳は skyong ba（保守する）としている。なお、漢訳は原文にない「矯設方便」という文言を「隠」の前に補っている。

(34) 諂と覆の相違について、TrBh 94 は以下のように説明する。

tat punar anyenānyat pratisaran (read pratisarad) vikṣipati. aparispṛuṭam vā pratipadyate. ata eva śāṭhyam mraṁśād bhidyate. sa hi spṛuṭam eva pracchādayati na kākva.

さらにそれ（諂）は、あることを別なことですり替えてはぐらかすこと、あるいは不明瞭にすることである。まさにこの故に、諂は覆とは異なる。というのは、それ（覆）ははっきりと覆い隠すのであって、声色の変化によって〔覆い隠すの〕ではないからである。

なお、同様の説明は PSkV 77 にもみられる。

(35) 他の論書における諂の定義については、BK-I 133–134、BK-II 124–126、BK-III 174–176、BK-IV 195–197、BK-V なし、BK-VI 93、PSkV 67–68 参照。

(36) pratisaraṇa に関して、「すり替える」という意味は辞書類に採録されていないが、TrBh と PSkV の並行箇所や（本稿 fn. 34 参照）、YBh (ŚrutBh_h) の prati/sr_ṣ の用例をふまえてこのように訳した。Cf. ŚrutBh_h 119.1–4:

katham anyenānyam pratisarati. pūrvikaṁ pratiññāṁ utsrjyānyam pratiññāṁ ālambate, pūrvakaṁ hetum udāharaṇam sārūpyam vairūpyam pratyakṣam anumānam āptāgamam utsrjānyam hetum yāvad āptāgamam ālambate.

〔矢板訳: idem 37.16–19〕あるものを別のものと取り替えるというのはどのようにするのか。以前に〔提言した〕主張命題を捨てて別な主張命題を持ち出したり、以前に〔提言した〕理由・引喩・類似・異類・現量・比量・正教量を捨てて別な理由乃至正教量を取り出すのである。

1.1.5.1.4.1.39 橋

【AS】 AS-Ms 4v3 (Gokhale 17.24–26) , ASVy-Ms 15r5–6 (Li [2016: 227.7–9]) , cf. 早島 62.

Vy 15r6 madaḥ katamaḥ. ārogyaṃ vāgamyā⁽³⁷⁾ yauvanaṃ vā dīrghāyuskalakṣaṇaṃ vopala-
labhyānyatamānyatamāṃ vā sāsravāṃ⁽³⁸⁾ sampattiṃ rāgāṃśikaṃ nandīsaumanasyam.
sarvakleśopakleśasaṃniśrayadānakarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 9v1–2 (Tatia 7.21–23) , ASVy-Ms 15v1–2 (Li [2016: 227.10–12]) , cf. 早島 63.

Vy 15v1 dīrghāyuskalakṣaṇagrahaṇaṃ tadvikalpanād amaravitarkapūrvakaṃ jīvitamado-
Bh 9v2 tpatteḥ. anyatamānyatamā sāsravā sampattiḥ kulabalarūpamedhābuddhibhogai-
Vy 15v2 śvaryādikā veditavyā. rāgāṃśikaṃ nandīsaumanasyaṃ saṃkliṣṭo⁽³⁹⁾ harṣaviśeṣaḥ.

1.1.5.1.4.1.40 害

【AS】 AS-Ms 4v3–4 (Gokhale 17.26) , ASVy-Ms 15v2 (Li [2016: 227.13–14]) , cf. 早島 62

AS 4v4 vihiṃsā katamā. pratighāṃśikā⁽⁴⁰⁾ nirghṛṇatā niṣkaruṇatā nirdayatā.⁽⁴¹⁾ viheṭhana-
karmikā.

⁽³⁷⁾ vāgamyā] AS-Ms, vā nīśitya ASVy-Ms.

⁽³⁸⁾ sāsravāṃ] AS-Ms, sāśravāṃ ASVy-Ms.

⁽³⁹⁾ saṃkliṣṭo] ASBh-Ms Tatia, kliṣṭo ASVy-Ms.

⁽⁴⁰⁾ pratighāṃśikā] ASVy-Ms, prati /// (4v4)kā AS-Ms (写本の破損により二文字分欠損) .

⁽⁴¹⁾ nirdayatā] ASVy-Ms Gokhale, nidaryatā AS-Ms.

1.1.5.1.4.1.39 橋

【問】橋（驕り）とは何か。【答】健康や、若さや、長寿の兆し（相）にもとづいて、あるいはいずれかの有漏なる成功（sāmpatti）を得て、満悦することであって、〔それは〕貪の一部である。〔そして、〕一切の煩悩や随煩悩によりどこをを提供する作用をもつ⁽⁴²⁾。

「長寿の兆し」という文言があるのは、これ（長寿の兆し）を分別することにもとづいて、〔自身が〕不死〔であるかのような〕構想を先として⁽⁴³⁾、寿命に対する驕りが生じるからである。「いずれかの有漏なる成功」とは、家柄、力、容姿、聡明さ、叡智、財、権力などであると理解されるべきである。「満悦することであって、〔それは〕貪の一部である」とは、汚れたある特定の悦楽のことである。

1.1.5.1.4.1.40 害

【問】害とは何か。【答】冷酷であること、無慈悲であること、非情であることであって、瞋の一部である。〔そして、〕傷つける作用をもつ⁽⁴⁴⁾。

⁽⁴²⁾ 他の論書における橋の定義については、BK-I 135–137、BK-II 127–129、BK-III 177–178、BK-IV 198–200、BK-V なし、BK-VI 94–95、PSkV 68 を参照。

⁽⁴³⁾ amaravitarka については、『法蘊尼論』（T [26] 497c27–498a11）でも言及されている。

⁽⁴⁴⁾ 不害の定義については阿毘達磨集論研究会 [2017: 78–79] 参照。他の論書における害の定義については、BK-I 129–130、BK-II 130–132、BK-III 137–138、BK-IV 188–191、BK-V なし、BK-VI 91、PSkV 68 参照。

1.1.5.1.4.1.41 無慚

【AS】 AS-Ms 4v4 (Gokhale 17.27–28) , ASVy-Ms 15v2–3 (Li [2016: 227.15–16]) , cf. 早島 62.

vy 15v3 āhrīkyam katamat. rāgadveṣamohāṃśikā svayam avadyenāljjanā. sarvakleśopakleśa-
sāhāyyakarmakam.

1.1.5.1.4.1.42 無愧

【AS】 AS-Ms 4v4 (Gokhale 17.28–29) , ASVy-Ms 15v3 (Li [2016: 227.17–18]) , cf. 早島 62.

anapatrāpyam katamat. rāgadveṣamohāṃśikā parato 'vadyenāljjanā. sarvakleśo-
pakleśasāhāyyakarmakam.⁽⁴⁵⁾

⁽⁴⁵⁾ sarvakleśopakleśasāhāyyakarmakam] AS-Ms Gokhale, tat-karmakam eva ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.41 無慚

【問】無慚とは何か。【答】自らを省みて〔自身の〕過失について恥じないことであって、貪・瞋・痴の一部である。〔そして、〕一切の煩惱や随煩惱を助長する作用をもつ⁽⁴⁶⁾。

1.1.5.1.4.1.42 無愧

【問】無愧とは何か。【答】他者を顧みて〔自身の〕過失について恥じないことであって、貪・瞋・痴の一部である。〔そして、〕一切の煩惱や随煩惱を助長する作用をもつ⁽⁴⁷⁾。

⁽⁴⁶⁾ 慚の定義については阿毘達磨集論研究会 [2017: 72–73] 参照。他の論書における無慚の定義については、BK-I 109–113、BK-II 139–141、BK-III 124–127、BK-IV 166–168、BK-V なし、BK-VI 76–79、PSkV 69 参照。

⁽⁴⁷⁾ 愧の定義については阿毘達磨集論研究会 [2017: 72–73] 参照。他の論書における無愧の定義については、BK-I 114–118、BK-II 142–144、BK-III 128–129、BK-IV 169–171、BK-V なし、BK-VI 80–84、PSkV 69 参照。

1.1.5.1.4.1.43 惛沈

【AS】 AS-Ms 4v4–5 (Gokhale 17.29) , ASVy-Ms 15v3–4 (Li [2016: 227.19–20]) , cf. 早島 62.

styānaṃ katamat. mohāṃśikā cittākarmaṇyatā. sarvakleśopakleśasāhāyyakarmakam.

Vy 15v4
AS 4v5

1.1.5.1.4.1.44 掉挙

【AS】 AS-Ms 4v5 (Gokhale 17.30) , ASVy-Ms 15v4 (Li [2016: 227.21–22]) , cf. 早島 62.

auddhatyaṃ katamat. śubhanimittam anusarato rāgāṃśikaś cetaso 'vyupaśamaḥ.
śamathaparipanthakarmakam.

【ASBh】 ASBh-Ms 9v2–3 (Tatia 7.24–25) , ASVy-Ms 15v4–5 (Li [2016: 227.23–24]) , cf. 早島 63.

śubhanimittam anusarato rāgānukūlaṃ pūrvahasitaramitakrīḍitānusmaraṇāc citta-
syānupaśamo veditavyaḥ.

Vy 15v5
Bh 9v3

1.1.5.1.4.1.43 昏沈

【問】昏沈（抑うつ）とは何か。【答】心が軽快でないことであって、痴の一部である。〔そして、〕一切の煩悩や随煩悩を助長する作用をもつ⁽⁴⁸⁾。

1.1.5.1.4.1.44 掉挙

【問】掉挙（浮つき）とは何か。【答】魅力的なものごとの特徴⁽⁴⁹⁾を追いかける者の心がざわつくことであって、貪の一部である。〔そして、〕止を妨げる作用を持つ⁽⁵⁰⁾。

魅力的なものごとの特徴を追いかける者は、貪に従うかたちで、以前に笑ったこと、喜んだこと、楽しんだことなどを思い出すから、心が浮つくと理解されるべきである。

⁽⁴⁸⁾ 他の論書における昏沈の定義については、BK-I 107–108、BK-II 154–156、BK-III 151–153、BK-IV 164–165、BK-V なし、Bk-VI 73–74、PSkV 69 参照。

なお、AS、AS-Tib、ASVy、ASVy-Tib では、昏沈の作用を「一切の煩悩や随煩悩を助長する作用」と説明するが、他方、『集論』(T [31] 665a24–25) と『雜集論』(T [31] 699a27–28) では、「観を妨げる作用（障毘鉢舍那爲業）」と説明する。以下の点を踏まえると後者における説明の方が合理的であると考えられる。すなわち、一般に昏沈と掉挙は対の法として扱われるが、次の掉挙の作用に関しては AS 等においても「止を妨げる作用」と説明されている。また、AS 等における「一切の煩悩や随煩悩を助長する作用」という説明は、直前の、性質が異なる無慚・無愧の作用についての説明と完全に重複するものであり、その説明にある文言を誤って昏沈の説明の中にも写してしまった可能性が疑われる。本稿において梵文の訂正までは行っていないが、本来の形として自然な内容を含むのは『集論』『雜集論』であり、その場合に想定される梵文として vipaśyanāparipanthakarmakam のような文言があった可能性がある。『顯揚論』(T [31] 482c8–10) においても『集論』『雜集論』と同様の説明が見られる。

Cf. 『集論』(T [31] 665a25) :

障毘鉢舍那爲業。

『雜集論』(T [31] 699a27–28) :

障毘鉢舍那爲業。

『顯揚論』(T [31] 482c8–10) :

昏沈者。謂依身重甘執不進以爲樂故令心沈沒爲體。能障毘鉢舍那爲業。乃至增長昏沈爲業。如經說此人生起身意昏沈。

⁽⁴⁹⁾ 「魅力的なものごとの特徴」については、ŚrBh2 366–367 および『順正理論』(T [29] 773a) 参照。

⁽⁵⁰⁾ 他の論書における掉挙の定義については、BK-I 105–106、BK-II 157–159、BK-III 154–155、BK-IV 161–163、BK-V なし、BK-VI 75、PSkV 69–70 参照。

1.1.5.1.4.1.45 不信

【AS】 AS-Ms 4v5 (Gokhale 17.31–32) , ASVy-Ms 15v5–6 (Li [2016: 227.25–228.1]) , cf. 早島 64.

āsraddhyaṃ katamat. mohāṃśikaḥ kuśaleṣu dharmeṣu cetaso 'nabhisampratyayo
Vy 15v6 'prasādo⁽⁵¹⁾ 'nabhilāsaḥ. kausīdyasaṃniśrayadānakarmakam.

【ASBh】 ASBh-Ms 9v3 (Tatia 7.25–8.1) , ASVy-Ms 15v6 (Li [2016: 228.2]) , cf. 早島 65.

kausīdyasaṃniśrayadānakarmakatvam āsraddadhānasya prayogacchandābhāvāt.

1.1.5.1.4.1.46 懈怠

【AS】 AS-Ms 4v5–6 (Gokhale 17.32–33) , ASVy-Ms 15v6–16r1 (Li [2016: 228.3–4]) , cf. 早島 64.

kausīdyaṃ katamat. nidrāpārśvaśayanasukhallikām āgamyā⁽⁵²⁾ mohāṃśikaś cetaso
AS 4v6, Vy 16r1 'nabhyutsāhaḥ. kuśalapakṣaprayogaparipanthakarmakaḥ.

1.1.5.1.4.1.47 放逸

【AS】 AS-Ms 4v6 (Gokhale 17.33–18.2) , ASVy-Ms 16r1–2 (Li [2016: 228.5–7]) , cf. 早島 64.

pramādaḥ katamaḥ. sakausīdyān lobhadveṣamohān niśritya kuśalānāṃ dharmānām
Vy 16r2 abhāvanā sāsravebhyaś ca dharmebyaś cetaso 'nārakṣā. akuśalavṛddhikuśalaparihāṇi-
saṃniśrayadānakarmakaḥ.

⁽⁵¹⁾ 'nabhisampratyayo 'prasādo] AS-Ms Gokhale, 'prasādo 'nabhisampratyayo ASVy-Ms.

⁽⁵²⁾ āgamyā] AS-Ms Gokhale, āgatya ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.45 不信

【問】不信とは何か。【答】諸々の善法に対して心が確信しておらず、澄んでおらず、望みを持たないことであって、痴の一部である。〔そして、〕懈怠（怠惰）によりどころを提供する作用をもつ⁽⁵³⁾。

〔不信は〕懈怠によりどころを提供する作用をもつのである。〔善法に対する〕信のない者は修行への意欲を欠くからである。

1.1.5.1.4.1.46 懈怠

【問】懈怠（怠惰）とは何か。【答】眠ることや横になることや寝そべることといった楽にふけることにもとづいて、心に活力がないことであって、痴の一部である。〔そして、〕善品の修行を妨げる作用をもつ⁽⁵⁴⁾。

1.1.5.1.4.1.47 放逸

【問】放逸とは何か。【答】懈怠を伴った貪・瞋・痴に依存して、諸々の善法を修習せず、有漏の諸法から心を守らないことである。〔そして、〕不善の増大と善の減少によりどころを提供する作用をもつ⁽⁵⁵⁾。

⁽⁵³⁾ 信の定義については阿毘達磨集論研究会 [2017: 72–73] 参照。他の論書における不信の定義については、BK-I 103–104、BK-II 145–147、BK-III なし、BK-IV 159–160、BK-V なし、BK-VI 72、PSkV 70 参照。

⁽⁵⁴⁾ 他の論書における懈怠の定義については、BK-I 101–102、BK-II 148–150、BK-III 149–150、BK-IV 157–158、BK-V なし、BK-VI 71、PSkV 70 参照。なお、MAVT 81 にも同様の内容が見られる。

⁽⁵⁵⁾ 他の論書における放逸の定義については、BK-I 99–100、BK-II 151–153、BK-III 142–145、BK-IV 154–156、BK-V なし、BK-VI 70、PSkV 71 参照。

1.1.5.1.4.1.48 忘念

【AS】 AS-Ms 4v6–7 (Gokhale 18.2) , ASVy-Ms 16r2–3 (Li [2016: 228.8–9]) , cf. 早島 64.

muṣitasmr̥titā katamā. kleśasaṃprayuktā smṛtiḥ. vikṣepasaṃniśrayadānakarmikā.

1.1.5.1.4.1.49 不正知

【AS】 AS-Ms 4v7 (Gokhale 18.3–4) , ASVy-Ms 16r3 (Li [2016: 228.10–11]) , cf. 早島 64.

asaṃprajanyaṃ katamat. kleśasaṃprayuktā prajñā yayāsaṃviditā kāyavākcittacaryā pravartate. āpattisaṃniśrayadānakarmakam.

【ASBh】 ASBh-Ms 9v3–4 (Tatia 8.1–3) , ASVy-Ms 16r3–4 (Li [2016: 228.12–13]) , cf. 早島 65.

asaṃviditā kāyavākcittacaryābhikramapratikramādiṣu samyagapratyavekṣitatayā veditavyā. evaṃ hy asya karaṇīyākaraṇīyājñānād āpattayo bhavantīti.

AS 4v7
Vy 16r3

Vy 16r4
Bh 9v4

1.1.5.1.4.1.48 忘念

【問】忘念⁽⁵⁶⁾とは何か。【答】煩惱と結びついた念⁽⁵⁷⁾である。〔そして、〕散乱⁽⁵⁸⁾（心が散漫になること）によりどころを提供する作用をもつ⁽⁵⁹⁾。

1.1.5.1.4.1.49 不正知

【問】不正知とは何か。【答】煩惱と結びついた慧である。それによって身体・言葉・心の浅はかな行動が生じる。〔そして、〕罪を犯すことによりどころを提供する作用をもつ⁽⁶⁰⁾。

「身体・言葉・心の浅はかな行動」とは、行ったり来たり⁽⁶¹⁾など〔の自分の身体の行動やその他の言葉や心の行動〕について、よく考えないことによって〔生じるものである〕と理解されるべきである。というのも、以上のように為すべきことと為すべきではないことを知らないから、この者が諸々の罪を犯すことになるからということである。

(56) 忘念とは、注意の持続状態が奪われていることを意味する。

(57) 念については、阿毘達磨集論研究会〔2017: 68–69〕参照。

(58) 「散乱」については、1.1.5.1.4.1.50 以降を参照。

(59) 他の論書における忘念の定義については、BK-I なし、BK-II 160–162、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V なし、BK-VI なし、PSkV 71 参照。なお、AKBh 56 (smṛtir eva hi kliṣṭā muṣita-smṛtitā) にも忘念の定義が見られる。

(60) 他の論書における不正知の定義については、BK-I なし、BK-II 163–165、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V なし、BK-VI なし、PSkV 71 参照。

(61) 「行ったり来たり」という表現については、「声聞地」第一瑜伽処において、涅槃法縁の一つである samprajānadvihāritā（正知して住すること）を解説する中に見られる (ŚrBh₁ 20 において概要が説かれ、ŚrBh₁ 172ff. において詳説される)。

1.1.5.1.4.1.50 散乱

【AS】 AS-Ms 4v7–8 (Gokhale 18.4–5) , ASVy-Ms 16r4–5 (Li [2016: 228.14–16]) , cf. 早島 66.

vikṣepaḥ katamaḥ. rāgadveṣamohāṃśikaś cetaso visāraḥ. sa punaḥ svabhāvavikṣepo
bahirdhāvikṣepo 'dhyātmavikṣepo nimittavikṣepo⁽⁶²⁾ dauṣṭhulyavikṣepo manasikāra-
vikṣepaś ca.

1.1.5.1.4.1.50.1 自性散乱

【AS】 AS-Ms 4v8 (Gokhale 18.6) , ASVy-Ms 16r5–6 (Li [2016: 228.17]) , cf. 早島 66.

svabhāvavikṣepaḥ katamaḥ. pañca vijñānakāyāḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 9v4–5 (Tatia 8.4–5) , ASVy-Ms 16r6 (Li [2016: 228.18]) , cf. 早島 67.

svabhāvavikṣepaḥ pañca vijñānakāyāḥ,⁽⁶³⁾ teṣāṃ⁽⁶⁴⁾ prakṛtyaivādhyātmaṃ
samādhātum aśakyatvāt.

⁽⁶²⁾ nimittavikṣepo] ASVy-Ms Gokhale, nimivikṣepo AS-Ms.

⁽⁶³⁾ svabhāvavikṣepaḥ pañca vijñānakāyāḥ] ASBh-Ms, om. ASVy-Ms.

⁽⁶⁴⁾ teṣāṃ] ASVy-Ms, om. ASBh-Ms.

1.1.5.1.4.1.50 散乱

【問】散乱とは何か。【答】心が散漫になること⁽⁶⁵⁾であって、貪・瞋・痴の一部である。さらにそれ（散乱）は、自性散乱、外的散乱、内的散乱、因相散乱、麁重散乱、作意散乱である⁽⁶⁶⁾。

1.1.5.1.4.1.50.1 自性散乱

【問】自性散乱⁽⁶⁷⁾とは何か。【答】五識身である。

「自性散乱」とは、五識身である。それら（五識身）は、そもそも〔それら自体の〕本性の上からして、内観を行うことができないからである⁽⁶⁸⁾。

⁽⁶⁵⁾ visāra については、「散漫になる」のほかにも「逸れる」、「乖離する」等の意味で用いられているものと思われる。以下の各散乱の解説を参照。

⁽⁶⁶⁾ 他の論書における散乱の定義については、BK-I なし、BK-II 166–168、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V なし、BK-VI なし、PSkV 71 参照。また、六種の散乱については資料2を参照。なお、AKBh 56 (samādhir eva kliṣṭo vikṣepa ity) にも散乱の定義が見られる。

⁽⁶⁷⁾ 自性散乱とは、本性として常に心が集中せずに散漫であることを意味する。

⁽⁶⁸⁾ 自性散乱が五識身であるのは、内観を行えるのは意識のみだからである。

1.1.5.1.4.1.50.2 外的散乱

【AS】 AS-Ms 4v8 (Gokhale 18.6–7) , ASVy-Ms 16r6 (Li [2016: 228.19–20]) , cf. 早島 66.

bahirdhāvikṣepaḥ katamaḥ. kuśalaprayuktasya pañcasu kāmagaṇeṣu cetaso visāraḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 9v5 (Tatia 8.5–6) , ASVy-Ms 16r6–v1 (Li [2016: 228.21–22]) , cf. 早島 67.

bahirdhāvikṣepaḥ⁽⁶⁹⁾ śrutādikuśale **prayuktasya** tadālaṃbanād bahiḥ **kāma-**
gaṇeṣu cittagamaṇam veditavyam.

1.1.5.1.4.1.50.3 内的散乱

【AS】 AS-Ms 4v8–5r1 (Gokhale 18.7–8) , ASVy-Ms 16v1 (Li [2016: 228.23–24]) , cf. 早島 66.

adhyātmavikṣepaḥ katamaḥ. [△]kuśalaprayuktasya layauddhatyāsvādanā.⁽⁷⁰⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 9v5–10r1 (Tatia 8.6–7) , ASVy-Ms 16v1–2 (Li [2016: 228.25]) , cf. 早島 67.

adhyātmavikṣepaḥ⁽⁷¹⁾ samādhiprayuktasyaiva taccyutikarau⁽⁷²⁾ **layauddhatyam**
āsvādanā ca.

⁽⁶⁹⁾ bahirdhāvikṣepaḥ] ASBh-Ms, om. ASVy-Ms.

⁽⁷⁰⁾ layauddhatyāsvādanā] AS-Ms, laya auddhatyam āsvādanā ca ASVy-Ms.

⁽⁷¹⁾ adhyātmavikṣepaḥ] ASBh-Ms, om. ASVy-Ms.

⁽⁷²⁾ taccyutikarau] em., tacyutikarau ASBh-Ms, taccyutikaro ASVy-Ms, taccyutikārau Tatia.

Vy 16v1

AS 5r1

Bh 10r1
Vy 16v2

1.1.5.1.4.1.50.2 外的散乱

【問】外的散乱⁽⁷³⁾とは何か。【答】善を修行している者が、五つの欲望の対象に心を逸らししてしまうことである。

「外的散乱」とは、聞などという善を修行している者が〔修行中の〕その所縁から外れて欲望の対象に心を向けてしまうことと理解されるべきである。

1.1.5.1.4.1.50.3 内的散乱

【問】内的散乱⁽⁷⁴⁾とは何か。【答】善を修行している者の、沈鬱 (laya) ・掉挙と、〔三摩地への〕耽溺である。

「内的散乱」とは、三摩地を修行している者のみの、それ（三摩地）からの脱落をもたらす二つ〔の散乱〕である。〔つまり、〕沈鬱・掉挙と、〔三摩地への〕耽溺である。

⁽⁷³⁾ 外的散乱とは、心が外に向かい散漫になることを意味する。

⁽⁷⁴⁾ 内的散乱とは、心が心内の原因で散漫になることを意味する。

1.1.5.1.4.1.50.4 因相散乱

【AS】 AS-Ms 5r1 (Gokhale 18.8) , ASVy-Ms 16v2 (Li [2016: 228.26]) , cf. 早島 66.

nimittavikṣepaḥ katamaḥ. parasambhāvanām sampuraskṛtya⁽⁷⁵⁾ kuśalaprayogaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 10r1–2 (Tatia 8.8–9) , ASVy-Ms 16v2–3 (Li [2016: 229.1–2]) , cf. 早島 67.

nimittavikṣepaḥ⁽⁷⁶⁾ pare mām guṇavattayā sambhāvayaṣyantīty etannimittam
etadartham kuśalaprayuktasya śanaḥ⁽⁷⁷⁾ tatparihāṇito veditavyaḥ.

1.1.5.1.4.1.50.5 麁重散乱

【AS】 AS-Ms 5r1 (Gokhale 18.8–10) , ASVy-Ms 16v3–4 (Li [2016: 229.3–5]) , cf. 早島 66.

dauṣṭhulyavikṣepaḥ katamaḥ. ahaṃkāramamakārāsmimānapakṣyaṃ dauṣṭhulyam
āgamyā kuśalaprayuktasyotpannotpanneṣu⁽⁷⁸⁾ vediteṣv ahaṃ_△ iti vā mameti vāsmīti vā
udgraho vyavakiraṇā nimittikāraḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 10r2–4 (Tatia 8.9–13) , ASVy-Ms 16v4–6 (Li [2016: 229.6–9]) , cf. 早島 67.

dauṣṭhulyavikṣepo⁽⁷⁹⁾ 'haṃkāradidauṣṭhulyavaśād utpannotpanneṣu sukhādiṣu
vediteṣv ahaṃ mamāsmīti vā karaṇāt kuśalapakṣāpariśuddhito veditavyaḥ. āditas
tathodgrahaṇam udgrahaḥ. vyavakiraṇā⁽⁸⁰⁾ tadūrdhvaṃ⁽⁸¹⁾ tena cittasamṭānasya
miśrībhāvaḥ. nimittikāras tasyaiva⁽⁸²⁾ veditasya punaḥ punaś citrīkāro veditavyaḥ.

(75) sampuraskṛtya] AS-Ms, puraskṛtya ASVy-Ms.

(76) nimittavikṣepaḥ] ASBh-Ms, om. ASVy-Ms.

(77) śanaḥ] ASBh-Ms, śamaiḥ ASVy-Ms.

(78) AS-Ms では prayukta の yu に o の母音記号もついている。

(79) dauṣṭhulyavikṣepo] ASBh-Ms, om. ASVy-Ms.

(80) udgrahaḥ. vyavakiraṇā] em. Tatia, udgrahaḥ. vyadhikaraṇā ASBh-Ms, udgrahavyavakiraṇā ASVy-Ms.

(81) tadūrdhvaṃ] ASBh-Ms, tadūrddham ASVy-Ms.

(82) tasyaiva] ASBh-Ms, tu tasyaiva ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.50.4 因相散乱

【問】因相散乱⁽⁸³⁾とは何か。【答】他者たちからの尊敬の為に善を修行することである。

「因相散乱」とは、「他者たちが私を有徳の者として尊敬するであろう」という、このようなことを動機（因相）とし、このようなことをもくろんで、善を修行する者が、徐々にそれを放棄するという観点から理解されるべきである。

1.1.5.1.4.1.50.5 麁重散乱

【問】麁重散乱⁽⁸⁴⁾とは何か。【答】「私」という意識・「私のもの」という意識・「私である」という慢心に与する麁重（心の鈍重さ・重し）に基づいて、善を修行する者が、それぞれに生じた感受に対して、「私」「私のもの」「私である」と把握し、混同し、具体化する（nimittikāra 取相）ことである。

「麁重散乱」とは、「私」という意識などによる麁重によって、〔つまり〕それぞれ生じた楽などの感受に対して「私」「私のもの」「私である」と〔思いを〕なすことにより善に属するものを浄化しないという観点から〔麁重の意味が〕理解されるべきである⁽⁸⁵⁾。〔散乱に関して言うと、〕「把握」とは、初めに以上のように〔「私」などと〕把握することであり、「混同」とは、その後それ（誤った把握）と心の連続体（相続）が混じり合ってしまうことであり、「具体化（取相）」とは、同じその感受を繰り返し思い描くことであると理解されるべきである。

(83) 因相散乱とは、心が不純な動機によって散漫になることを意味する。

(84) 麁重散乱とは、誤った自己認識によって経験の対象に自己を付託することを意味する。

(85) ahaṃkāradāuṣṭhulyavaśāt と karaṇāt と kuśalapakṣāparīśuddhiḥ との関係は難解である。ahaṃkāradī に karaṇāt の内容が対応し、そして dauṣṭhulyavaśāt に kuśalapakṣāparīśuddhiḥ が対応すると理解して、このように訳したが、Tib. (D7b2–3, P9a3–4)、Ch. (T[31] 699b27–29) では ahaṃkāradāuṣṭhulyavaśa によって karaṇa、karaṇa によって kuśalapakṣāparīśuddhi と理解しているようであり、この場合は次のようになる。

「麁重散乱」とは、「私」という意識などによる麁重によって、それぞれ生じた楽などの感受に対して「私」「私のもの」「私である」と〔思いを〕なすことの故に、善に属するものを浄化しないことであると理解されるべきである。

また、ahaṃkāradāuṣṭhulyavaśāt が具体的に karaṇāt の内容として説明されていると理解すれば、次のような訳になる。

「麁重散乱」とは、「私」という意識などによる麁重によって、〔つまり〕それぞれ生じた楽などの感受に対して「私」「私のもの」「私である」と〔思いを〕なすことによって、善に属するものを浄化しないことであると理解されるべきである。

1.1.5.1.4.1.50.6 作意散乱

【AS】 AS-Ms 5r2 (Gokhale 18.10–11) , ASVy-Ms 16v6 (Li [2016: 229.10–11]) , cf. 早島 66.

AS 5r2

manasikāravikṣepaḥ katamaḥ. samāpattyantaraṃ vā yānāntaraṃ vā samāpadyamānasya
 samśrayato vā yo visāraḥ.⁽⁸⁶⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 10r4–5 (Tatia 8.13–15) , ASVy-Ms 16v6–17r1 (Li [2016: 229.12–13]) , cf. 早島 67.

Vy 17r1

Bh 10r5

manasikāravikṣepaḥ⁽⁸⁷⁾ samāpattyantaraṃ vā samāpadyamānasya yānā-
 ntaraṃ⁽⁸⁸⁾ vā samśrayataḥ pūrvasmād vyutthānato veditavyaḥ.

1.1.5.1.4.1.50.7 散乱の作用

【AS】 AS-Ms 5r2 (Gokhale 18.11) , ASVy-Ms 16v6 (Li [2016: 229.11]) , cf. 早島 66.

vairāgyaparipanthakarmakaḥ.⁽⁸⁹⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 10r5 (Tatia 8.15) , ASVy-Ms 17r1 (Li [2016: 229.13–14]) , cf. 早島 67.

vairāgyaparipanthakarmaka⁽⁹⁰⁾ ity upakleśātmakaṃ vikṣepam adhikṛtya.

(86) samāpattyantaraṃ vā yānāntaraṃ vā samāpadyamānasya samśrayato vā yo visāraḥ] em., samāpattyantaraṃ vā yānāntaraṃ vā samāpadyamānasya samśrayato vā yo visāraḥ AS-Ms, samāpattyantaraṃ vā samāpadyamānasya yānāntaraṃ vā samśrayato yo visāraḥ ASVy-Ms.

(87) manasikāravikṣepaḥ] ASBh-Ms, om. ASVy-Ms.

(88) yānāntaraṃ] ASVy-Ms, dhyānāntaraṃ ASBh-Ms.

(89) ASVy-Ms において vairāgyaparipanthakarmakaḥ の文言は、直前の作意散乱に関する AS 本文と ASBh 注釈文の間に置かれる。しかしその場合、当該文言は作意散乱の作用を説くものとして理解されるため、作用が説かれない自性散乱ないし麁重散乱の 5 つとは説き方に相違が生じ、また、それら六種散乱全体を含む広義の散乱に関しても、心所法の中で散乱のみ作用が説かれないことになるという問題が生じる。ASVy-Ms における AS 本文と ASBh 注釈文の合し方に、こうした教説構造上の問題があることから、本稿では当該文言をこの位置に訂正し、六種散乱の全体を含む広義の散乱の作用を説くものとして理解した。ASVy における当該文言の位置に関して、チベット語訳は梵文写本を支持するが、漢訳はこの訂正を支持する。

(90) -paripantha-] ASBh-Ms, -paripanthi- ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.50.6 作意散乱

【問】作意散乱⁽⁹¹⁾とは何か。【答】〔適切でない〕別の精神統一に入ろうとしている者が、或いは別の乗に依拠しようとしている者が、〔以前の適切な精神統一、或いは乗から〕乖離してしまうことである。

「作意散乱」とは、〔適切でない〕別の精神統一に入ろうとしている者が、或いは別の乗に依拠しようとしている者が、以前の〔適切な精神統一、或いは乗〕から抜け出してしまうという観点から理解されるべきである。

1.1.5.1.4.1.50.7 散乱の作用

〔以上、六つの散乱は〕欲望から離れることを妨げる作用をもつ⁽⁹²⁾。

「欲望から離れることを妨げる作用をもつ」とは、随煩惱を自体とする〔、以上の六つの〕散乱に関して〔言う〕。

⁽⁹¹⁾ 作意散乱とは、心が集中状態から乖離することを意味する。

⁽⁹²⁾ 散乱の作用については TrBh 98 (eṣa ca vairāgyaparipanthikarmakāḥ)、PSkV 71 (eṣa ca vairāgyaparipanthakarmakāḥ) 参照。

1.1.5.1.4.1.51 睡眠

【AS】 AS-Ms 5r2–3 (Gokhale 18.12–13) , ASVy-Ms 17r1–2 (Li [2016: 229.15–17]) , cf. 早島 68.

middhaṃ katamat. middhanimittam āgamyā mohāṃśikaś cetaso 'bhisamkṣepaḥ
kuśalo 'kuśalo 'vyākṛtaḥ.⁽⁹³⁾ kāle vākāle vā yukto vāyukto vā.⁽⁹⁴⁾ kṛtyātipattisanniśraya-
dānakarmakam.⁽⁹⁵⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 10r5–v3 (Tatia 8.16–22) , ASVy-Ms 17r2–5 (Li [2016: 229.18–330.2]) , cf. 早島 69.

middhanimittam tadyathā daurbalyaṃ śramaḥ kāyagauravo 'ndhakāranimittasya
manasikaraṇaṃ sarvārambhāṇānām⁽⁹⁶⁾ adhyupekṣaṇaṃ punaḥ punas tatkālanidrā-
bhyāso mantrabalena parair⁽⁹⁷⁾ nidropasaṃhāras tathā saṃvāhanādibhir⁽⁹⁸⁾ veti.
mohāṃśika itī samādhito viśeṣaṇārtham. kuśalādhābhāvavacanam⁽⁹⁹⁾ na tv avaśyaṃ
mohāṃśika⁽¹⁰⁰⁾ itī kṛtvā. **kāla** itī rātryā madhyame yāme. **akāle** tato 'nyasmin.⁽¹⁰¹⁾
yuktaḥ kāle⁽¹⁰²⁾ yathānujñam. **akāle** 'pi glānasya karmaṇyatārtham vā. **ayuktas** tato
'nyaḥ. **kṛtyātipattisaṃniśrayadānam**⁽¹⁰³⁾ upakleśātmakasya middhasya veditavyam.

(93) kuśalo 'kuśalo 'vyākṛtaḥ] AS-Ms, kuśalam akuśalam avyākṛtam ASVy-Ms.

(94) yukto vāyukto vā] AS-Ms, yuktam vā 'yuktam vā ASVy-Ms.

(95) -dānakarmakam] ASVy-Ms, -dānakarmakaḥ AS-Ms.

(96) sarvārambhāṇānām] em., sarvārambhāṇānaṃ? ASBh-Ms, sarvārambhāṇā{{nā}}m ASVy-Ms, sarvārambhāṇām Tatia.

(97) parair] em., parai ASBh-Ms, pareṣān ASVy-Ms.

(98) saṃvāhanādibhir] em., saṃvāhanādibhi ASBh-Ms, saṃvāhanādyini ASVy-Ms.

(99) kuśalādhābhāvavacanam] ASVy-Ms Tatia, kuśalābhāvavacanam ASBh-Ms.

(100) mohāṃśika] ASVy-Ms, mohātmaka ASBh-Ms.

(101) 'kāle tato 'nyasmin] ASVy-Ms, akāla tato 'nyaḥ ASBh-Ms.

(102) yuktaḥ kāle] em., yuktam kāle ASBh-Ms, yuktaḥ kālo ASVy-Ms.

(103) -dānam] ASBh-Ms, -dānakarmakam ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.51 睡眠

【問】睡眠（眠気）とは何か。【答】睡眠をもたらす原因にもとづいて心が萎むこと (abhisamkṣepa) ⁽¹⁰⁴⁾ である。〔それには、〕善、不善、無記、或いは適切な時におけるもの、不適切な時におけるもの、或いは相応しいもの、相応しくないものがある。〔それは〕痴の一部である。〔そして、それは〕なすべきことをやり過ぎてしまうことによりどころを提供する作用をもつ ⁽¹⁰⁵⁾。

「睡眠をもたらす原因」とは、例えば、無気力、疲労、体の重々しさ、暗闇の様子に心を向けること、あらゆる〔行為への〕着手をやり過ぎること（何も始めないこと）、一時的な居眠りを何度も繰り返すこと、呪文の力によって他者たちが睡眠をもたらすこと、同様に按摩などによって ⁽¹⁰⁶⁾ 〔他者たちが睡眠をもたらすこと〕である。「痴の一部」とは、三摩地と区別するためである。〔痴には属さない〕善などの性質に言及するのは、「〔睡眠は痴の一部であることもあるの〕けれども、必ずしも痴の一部というわけではない」と考えてである ⁽¹⁰⁷⁾。「適切な時におけるもの」とは、夜の中ほど（夜中分）におけるものである。「不適切な時におけるもの」とは、それ以外におけるものである。「相応しいもの」とは、適切な時においては〔仏陀が〕許諾したとおりのものである。あるいは不適切な時であるとしても、病人を軽快にするため ⁽¹⁰⁸⁾ 〔であるならば、相応しいものである〕。「相応しくないもの」とは、それ以外のものである。「なすべきことをやり過ぎてしまうことによりどころを提供する」とは、随煩惱を自体とする睡眠が〔拠り所を提供する〕、と知るべきである。

⁽¹⁰⁴⁾ TrBh は abhisamkṣepa を「心が眼などの根を通してはたらかなくなる」と説明する。Cf. TrBh 98: abhisamkṣepasā cetasaś caksurādīndriyadvāreṇāpravṛtṭiḥ.

⁽¹⁰⁵⁾ 他の論書における睡眠の定義については、BK-I 142–143、BK-II 169–172、BK-III 185–187、BK-IV 207–209、BK-V なし、BK-VI 98、PSkV 72–73 参照。

⁽¹⁰⁶⁾ 辞書（モニエルでは samvāh の項目）・Tib. (lus mnye ba) を参照に samvāhana を「按摩」と訳した。一方、Ch. (或因動扇涼風吹) は「扇で扇ぐこと」として理解しており、YBh (ManoBh) の対応箇所 (samvāhyamāno) の漢訳も「扇で扇ぐこと」と理解している。いずれも睡眠をもたらす要因としては認められる。

ManoBh 14.1–4, T [30] 281a3–7:

katham svapiti. prakṛtyāśrayadaurbalyatayā pariśramaklamadoṣatayā bhojanagauravatatayāndhakāranimittamanasikāratayā sarvakarmāntaprativisrambhaṇatayā nidrābhyastatayā paropasaṃhāratayā ca. tadyathā. samvāhyamāno vā vidyayā vaṣadhairvā prabhāveṇāpasvāpyamānaḥ svapiti.

云何夢。謂由依止性羸劣。或由疲倦過失。或由食所沈重。或由於闇相作意思惟。或由休息一切事業。或由串習睡眠。或由他所引發。如由搖扇。或由明呪。或由於藥。或由威神。而發昏夢。

⁽¹⁰⁷⁾ 「痴の一部」の解釈は、AS と ASBh が相違しているようにも見える。AS は睡眠全てを「痴の一部」とだけ説明するが、ASBh は睡眠全てではないことを説明するために、AS の mohāṃśika の後に na tv avaśyaṃ mohāṃśika を補うことを示唆している。

⁽¹⁰⁸⁾ glānasya karmaṇyatārtham を梵文に従って「病人を軽快にするため」と訳したが、Tib. (na ba dang las su rung bar bya ba'i phyir)、Ch. (或因病患或爲調適) は異なっており、原文が glānakarmaṇyatārtham であった可能性を示唆する。その場合の訳は「病のため及び軽快になるため」となる。

1.1.5.1.4.1.52 悪作

【AS】 AS-Ms 5r3 (Gokhale 18.13–15) , ASVy-Ms 17r5–6 (Li [2016: 230.3–5]) , cf. 早島 68.

vy 17r6 kauṛṭyaṃ katamat. yad abhipretānabhipretaṃ karaṇākaraṇam⁽¹⁰⁹⁾ āgamyā mohāṃśikaś cetaso vipratīśāraḥ, kuśalam akuśalam avyākṛtaṃ kāle 'kāle yuktam ayuktañ ca. cittasthitiparipanthakarmakam.⁽¹¹⁰⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 10v3–5 (Tatia 8.22–26) , ASVy-Ms 17r6–v2 (Li [2016: 230.6–9]) , cf. 早島 69–71.

vy 17v1
Bh 10v4 abhipretaṃ karaṇam abhipretaṃpūrvikā sucaritaduścaritakriyā. anabhipretaṃ karaṇam parair balād avaṣṭabhya kāryamāṇasya kleśābhibhavād vā yathāyogaṃ veditavyam. mohāṃśika ity upakleśasaṃgrhītaḥ. kāle yāvan na prativiramati, akāle tadūrdhvam.⁽¹¹¹⁾ yuktaṃ sthāne, ayuktaṃ asthāne.

⁽¹⁰⁹⁾ karaṇākaraṇam] ASVy-Ms, kāraṇākāraṇam AS-Ms.

⁽¹¹⁰⁾ -panthikarmmakam] ASVy-Ms, -panthakarmakaḥ AS-Ms.

⁽¹¹¹⁾ tadūrdhvam] ASBh-Ms Tatia, tadūrddham ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.52 悪作

【問】悪作（後悔）とは何か。【答】意図して或いは意図せずに行うこと・行わないことにもとづいて、心が落胆すること（vipratīṣāra）であって、痴の一部である。〔悪作には、〕善、不善、無記があり、適切な時におけるものと不適切な時におけるもの、相応しいものと相応しくないものがある。〔そして、〕心が安定することを妨げる作用をもつ⁽¹¹²⁾。

「意図して行うこと」とは、意図を前提とした善行や悪行といった行為である。「意図せずに行うこと」とは、他者たちによって力づくで（balād avastābhya）、あるいは〔自身の〕煩悩に支配されて、〔意図しない〕行いをさせられつつある者にある〔行為であると〕適宜、理解されるべきである。「痴の一部である」とは、随煩悩に摂められたものということである。「適切な時におけるもの」とは、〔行為を〕終了しない間に〔生ずる悪作〕である。「不適切な時におけるもの」とは、その後に〔生ずる悪作〕である⁽¹¹³⁾。「相応しいもの」とは、適切な場合における〔悪作〕である。「相応しくないもの」とは、不適切な場合における〔悪作〕である。

⁽¹¹²⁾ 他の論書における悪作の定義については、BK-I 140–141、BK-II 173–175、BK-III 181–184、BK-IV 204–206、BK-V なし、BK-VI 97、PSkV 71–72 参照。

⁽¹¹³⁾ Cf. 『雑集論述記』4, 正統 [48] 63c1–2: 作事未了未出離時即生追悔。作事已了出離已後名為非時方生追悔。

1.1.5.1.4.1.53 尋

【AS】 AS-Ms 5r3 (Gokhale 18.15–16) , ASVy-Ms 17v2 (Li [2016: 230.10–11]) , cf. 早島 68.

vitarkaḥ katamaḥ. cetanāṃ vā niśritya prajñāṃ vā paryeṣako manojalpaḥ. sā ca cittasyaudārikatā.

【ASBh】 ASBh-Ms 10v5–6 (Tatia 8.26–9.1) , ASVy-Ms 17v2–3 (Li [2016: 230.12–13]) , cf. 早島 69–71.

cetanāṃ vā niśritya prajñāṃ vety anabhyūhābhyūhāvasthāyām⁽¹¹⁴⁾ yathākramam. paryeṣaṇākārā manaso 'bhijalpanā vitarkaḥ.⁽¹¹⁵⁾

1.1.5.1.4.1.54 伺

【AS】 AS-Ms 5r3–4 (Gokhale 18.16–17) , ASVy-Ms 17v3–4 (Li [2016: 230.14–15]) , cf. 早島 72.

vicāraḥ katamaḥ. cetanāṃ vā niśritya prajñāṃ vā pratyavekṣako manojalpaḥ. sā ca cittasya sūkṣmatā.⁽¹¹⁶⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 10v6 (Tatia 9.1–2) , ASVy-Ms 17v4 (Li [2016: 230.16–17]) , cf. 早島 73.

pratyavekṣaṇākārā⁽¹¹⁷⁾ tu vicāra iti.⁽¹¹⁸⁾

⁽¹¹⁴⁾ -āvasthāyām] ASBh-Ms Tatia, -āvasthāyor ASVy-Ms.

⁽¹¹⁵⁾ 'bhijalpanā vitarkaḥ] ASBh-Ms Tatia, jalpanā ASVy-Ms.

⁽¹¹⁶⁾ cittasya sūkṣmatā] AS-Ms, cittasūkṣmatā ASVy-Ms.

⁽¹¹⁷⁾ pratyavekṣaṇākārā] ASBh-Ms, cetanāṃ vā niśritya prajñāṃ vety anabhyūhābhyūhāvasthayor yathākramam pratyavekṣaṇākārā ASVy-Ms.

⁽¹¹⁸⁾ tu vicāra iti] em. (cf. ASBh-Tib.: so sor rtog pa'i rnam pa ni spyod pa'o), manaso 'bhijalpanānuvicāra iti ASBh-Ms Tatia, manaso 'bhijalpanā ASVy-Ms. なお、ASVy のチベット語訳 (so sor rtog pa'i rnam par yid kyis mngon par brjod pas so) と『雑集論』(伺察行相意言分別)は、ASVy-Ms を支持する。また、ASBh-Ms の anu は、apra と読みめるか (Harunaga Isaacson 氏のご教示による)。

1.1.5.1.4.1.53 尋

【問】尋（大まかな考察）とは何か。【答】思或いは慧に依拠して、追求を行う（paryeṣaka 尋求）心中のつぶやき（意言）である。そして、それは心の大雑把な特性（粗大性）である⁽¹¹⁹⁾。

「思或いは慧に依拠して」とは、順次に、〔前者は〕推測のない段階においてであり、〔後者は〕推測の段階においてである。尋とは、追求というあり方をもつ心の中つぶやきである。

1.1.5.1.4.1.54 伺

【問】伺（細やかな考察）とは何か。【答】思或いは慧に依拠して、吟味を行う心中のつぶやき（意言）である。そして、それは心の細やかな特性（微細性）である⁽¹²⁰⁾。

一方で、伺とは、吟味というあり方をもつ〔心の中つぶやきである〕。以上〔尋伺の特徴である〕。

⁽¹¹⁹⁾ 他の論書における尋の定義については、BK-I 144–145、BK-II 176–179、BK-III 188–192、BK-IV 210–213、BK-V 43–51、BK-VI 99、PSkV 73 参照。

⁽¹²⁰⁾ 他の論書における伺の定義については、BK-I 146–147、BK-II 180–183、BK-III 193–194、BK-IV 214–216、BK-V 52、BK-VI 100、PSkV 73–74 参照。

1.1.5.1.4.1.55 尋・伺の作用

【AS】 AS-Ms 5r4 (Gokhale 18.17–18) , ASVy-Ms 17v4–5 (Li [2016: 230.18]) , cf. 早島 72.

sparsāsparśavihārasaṃniśrayadānakarmakau.
△

【ASBh】 ASBh-Ms 10v6 (Tatia 9.2–3) , ASVy-Ms 17v5 (Li [2016: 230.19]) , cf. 早島 73.

tāv eva vitarkavicārau saṃbadhyete, audārikasūkṣmavyavasthānād anayoḥ.

1.1.5.1.4.1.56 善なる諸法・煩惱・随煩惱の作用

【AS】 AS-Ms 5r4 (Gokhale 18.18–19) , ASVy-Ms 17v5–6 (Li [2016: 230.20–21]) , cf. 早島 72.

api khalu kuśalānāṃ dharmāṇāṃ svavipakṣaprahāṇaṃ karma. kleśopakleśānāṃ
svapratipakṣaparipanthanāṃ karma.
△

【ASBh】 ASBh-Ms 10v6–11r1 (Tatia 9.4–6) , ASVy-Ms 17v6–18r1 (Li [2016: 230.22–24]) , cf. 早島 73.

tadyathālobhasya lobhaprahāṇaṃ, śraddhāyā āśraddhyaprahāṇaṃ. rāgapratipakṣo
vairāgyam, tasya paripanthakaraṇaṃ, tasya tena tadutpattāv antarāyakaraṇāt. evaṃ
krodhādīnāṃ apy upakleśānāṃ maitryādyātmīyapratipakṣāntarāyakaraṇaṃ veditavyam.
△

Vy 17v5

Vy 17v6

Bh 11r1

Vy 18r1

1.1.5.1.4.1.55 尋・伺の作用

〔そして、この尋と伺は禪定中において〕快適に過ごすことと不快に過ごすことに⁽¹²¹⁾よりどころを提供する作用をもつ⁽¹²²⁾。

まさにそれら尋と伺の二つは〔相対的に〕連関している。この二つが、大雑把な特性と細やかな特性（粗大性と微細性）〔という区別〕を規定するからである。

1.1.5.1.4.1.56 善なる諸法・煩惱・随煩惱の作用

さてまた、善なる諸法の作用は、自身の所対治（それ自身とは異なる要素）を断つことである。煩惱と随煩惱の作用は〔煩惱と随煩惱〕自身の能対治（それ自身を排斥する要素）を妨げることである。

例えば、無貪は貪を断ち、信は不信を断つ。貪の能対治は欲望から離れることである。それ（貪）は〔欲望から離れることを〕妨げる作用をもつ。それ（貪）は、〔つまり〕それによって、それ（欲望から離れること）の生起を邪魔するからである。忿などの随煩惱が、慈などという〔忿など〕自体の能対治の邪魔をすることも同様に理解されるべきである。

⁽¹²¹⁾ *sparśavihāra* について、阿毘達磨集論研究会 [2018: 31, fn. 7] では、PSkV が *sparśavihāra* という語を *sparśaḥ sukham. tena sahito vihāraḥ sparśavihāraḥ* と注釈していることについて「PSkV は *sparśavihāra* を具格の限定複合語と理解する」と注記した。「快適に過ごすこと」という翻訳についての変更はないが、PSkV はこの複合語を *madhyamapadalopasamāsa* と理解しており、この種の複合語は同格限定複合語に分類されるようである、とのご指摘を堀内俊郎氏よりいただいた。堀内氏のご指摘に感謝申し上げます。

⁽¹²²⁾ 尋・伺の作用については以下を参照。

TrBh 100:

etau ca sparśāsparśavihārasaṃniśrayadānakarmakau. anayoś caudārikasūkṣmatayā
vyavasthāpanāt prṭhakkaraṇam.

PSkV 84:

etau ca sparśāsparśavihārasaṃniśrayadānakarmakau. anayoś caudārikasūkṣmatayā
vyavasthāpanāt prṭhakkaraṇam.

資料1 随煩惱と不定の自性に関する対応一覧

本章では行蘊所攝の心諸法中、随煩惱や不定と対応する法が列挙される。Fn. 11 において言及したように、これらの法は貪などの法の一つの側面であり、名称上の存在（仮設有）にすぎない。そこで、本稿で取り上げた法と自性の対応関係を整理すれば次の通りである。

[単一の法を自性とするもの]

慳、憍、掉挙＝貪を自性とするもの

忿、恨、惱、嫉、害＝瞋を自性とするもの

覆、惛沈、不信、懈怠、（睡眠、悪作）＝癡を自性とするもの

[二つの法を自性とするもの]

誑、諂＝貪瞋を自性とするもの

[複数の法を自性とするもの]

無慚、無愧、散乱＝貪瞋癡を自性とするもの

[特殊なもの]

放逸＝貪瞋癡に依存した法

忘念＝煩惱相應の念

不正知＝煩惱相應の慧

尋伺＝思と慧

資料2 諸文献にみられる六種の散乱 (vikṣepa) について

ASBh は散乱を六種に分けて説明するが、その他の諸文献にも散乱を六種もしくは五種に分けて説明する例が確認される。以下、その解説を挙げ、その対応表を示す。また、付した数字は『解深密経』を基準として対応を示すものである。

- 『解深密経』

『解深密経』 T [16] 701c18–28.⁽¹²³⁾

- 1 善男子。若諸菩薩捨於大乘相應作意。墮在聲聞獨覺相應諸作意中。當知是名作意散動。
- 2 若於其外五種妙欲諸雜亂相。所有尋思隨煩惱中。及於其外所緣境中縱心流散。當知是名外心散動。
- 3 若由昏沈及以睡眠。或由沈沒或由愛味三摩鉢底。或由隨一三摩鉢底。諸隨煩惱之所染汚。當知是名内心散動。
- 4 若依外相。於内等持所行諸相。作意思惟名相散動。
- 5 若内作意。爲緣生起所有諸受。由龜重身計我起慢。當知是名龜重散動。

『深密解脫經』 T [16] 678b26–c6.⁽¹²⁴⁾

- 1 彌勒。若菩薩捨正念大乘相應相。隨念聲聞辟支佛相應念相。彌勒。是名菩薩正念散亂。
- 2 彌勒。若菩薩著外五欲樂憤鬧處。著諸覺觀隨順煩惱相念。是名外心散亂。
- 3 彌勒。若菩薩爲睡不利。心著三昧及餘三昧三摩婆提染於所染。彌勒。是名内心散亂。
- 4 彌勒。若菩薩依外相内身三昧境界相思惟。是名心散亂。
- 5 彌勒。若菩薩依内心思惟因緣。生覺觀煩惱。如是心是我。彌勒。是名煩惱散亂心。

Samdhi-nirmocana-sūtra VIII-34, 112.11–29.⁽¹²⁵⁾

- 1 byams pa gal te byang chub sems dpa' theg pa chen po dang ldan pa'i yid la byed pa btang ste. nyan thos dang. rang sangs rgyas dang ldan pa'i yid la byed par rab tu lhung na de ni yid la byed pa'i rnam par g-yeng ba yin no.
- 2 gal te phyi rol gyi 'dod pa'i yon tan lnga po dag dang. 'du 'dzi dang. mtshan ma dang. rnam par rtog pa dang. nye ba'i nyon mongs pa dang. phyi rol gyi dmigs pa rnams la sems rnam par 'phro bar gtong na de ni phyi rol tu sems rnam par g-yeng ba yin no.
- 3 gal te rmugs pa dang gnyid kyis bying pa 'am. snyoms par 'jug pa'i ro myang ba 'am. snyoms par 'jug pa'i nye ba'i nyon mongs pa gang yang rung bas nyon mongs par gyur na. de ni nang du sems rnam par g-yeng ba yin no.

⁽¹²³⁾ Cf. 『解深密経』 T [16] 701c14–18.

⁽¹²⁴⁾ Cf. 『深密解脫経』 T [16] 678b23–26.

⁽¹²⁵⁾ Cf. SNS VIII-34, 112.4–10.

- 4 gal te phyi rol gyi mtshan ma la brten nas nang gi ting nge 'dzin gyi spyod yul
gyi mtshan ma yid la byed na de ni mtshan ma'i rnam par g-yeng ba yin no.
5 gal te nang gi yid la byed pa la brten nas byung ba'i tshor ba la gnas ngan len
gyi lus kyis nga'o snyam du rlom sems su byed na de ni gnas ngan len gyi rnam
par g-yeng ba yin no.

● 『顯揚聖教論』 T [31] 568b4–13.⁽¹²⁶⁾

- 1 一作意心散亂。謂諸菩薩棄捨大乘相應作意。退習聲聞獨覺相應下劣作意。
- 2 二外心散亂。謂於外妙五欲中及憤鬧相貌尋思隨煩惱外境界中縱心流散。
- 3 三內心散亂。謂或由昏沈睡眠下劣。或由味著諸定。或由種種定中隨煩惱故。惱亂其心。
- 4 四相心散亂。謂依止外相作意思惟內境相貌。
- 5 五龜重心散亂。謂內作意爲緣生起諸受。由龜重身故計我我所。
- 6 六自性心散亂。謂五識身。

● 『六門教授習定論』 T [31] 775c4–19.⁽¹²⁷⁾

- 2 外心散亂者。於住心境起緣之時。遂緣餘事心流散故。
- 3 內心散亂者。謂掉舉等三於所緣境中間亂起故。
- 4 邪緣散亂者。於修定時諸有尋求。親識等事而生顧戀。
- 5 龜重心散亂者。有二我執令其心亂。於修定時有此二事。謂益及損。若身安隱名之爲益。身體羸弱即是其損。或云我今得樂。或云我今有苦。或云是我之樂。或云是我之苦。此中我者。是執取義。
- 1 言作意心散亂者。有其三種。於所緣相分明而住。是思察性。或從此乘更趣餘乘。或從此定更趣餘定。謂極分別思察定時。遂使心亂名心散亂。異斯唯念心者。此能對治初作意散亂。由不分別而緣於境。但有念心。此明成就心不忘念。此三散亂。初二應捨。第三由是從定趣定。希勝上故亦非是過。

● 『攝大乘論釋』 世親（真諦訳） T [31] 217b1–4.

- 6 一自性散亂。謂五識。
- 2 二外散亂。謂意識馳動於外塵。
- 3 三內散亂。謂心高下及味等。
- 5 四龜重散亂。謂計我我所等。
- 1 五思惟散亂。謂下劣心。菩薩捨大乘。思惟小乘。

● 『中辺分別論釋』 MAVBh 65.3–9.⁽¹²⁸⁾

⁽¹²⁶⁾ Cf. 『顯揚論』 T [31] 568a29–b4.

⁽¹²⁷⁾ Cf. 『六門教授論』 T [31] 775b14–23, T [31] 775c2–4.

⁽¹²⁸⁾ Cf. MAV 64.19–65.1.

vyutthānaṃ viṣaye sārāṣaṭ tathāsvādālayoddhataḥ. V-11cd
sambhāvanābhisandhiś ca manaskāre 'py ahaṃkṛtiḥ.
hīnacittaṃ ca vikṣepaḥ parijñeyo hi dhīmatā. V-12

- 6 tatra vyutthānaṃ samādhitaḥ pañcabhir vijñānakāyaiḥ prakṛtīvikṣepaḥ.
 1 viṣaye viśāro bahirdhāvikṣepaḥ.
 2 samādher āsvādanā layauddhatyaṃ cādhyātmavikṣepaḥ.
 3 sambhāvanābhisandhiḥ nimittavikṣepaḥ. tan nimittaṃ kṛtvā prayogāt.
 4 sāhaṃkāraṃmanaskārātā dauṣṭhulyavikṣepaḥ. dauṣṭhulyavaśenāsmimāna-
 samudācārāt.
 5 hīnacittatvaṃ manasikāravikṣepaḥ. hīnayānamanasikārasamudācārāt.

対応表

解深密經	無著			世親	
	顯揚聖教論	大乘阿毘達磨集論	六門教授習定論	撰大乘論積(真諦訳)	中辺分別論積
五種	六種	六種	五種	五種	六種
1 作意散動	1 作意心散乱	6 自性散乱		6 自性散乱	6 自性散乱
2 外心散動	2 外心散乱	2 外散乱	2 外心散乱	2 外散乱	2 外散乱
3 内心散動	3 内心散乱	3 内散乱	3 内心散乱	3 内散乱	3 内散乱
4 相散動	4 相心散乱	4 相散乱	4 邪縁心散乱		4 相散乱
5 龜重散動	5 龜重心散乱	5 龜重散乱	5 龜重心散乱	5 龜重散乱	5 龜重散乱
	6 自性心散乱	1 作意散乱	1 作意心散乱	1 思惟散乱	1 作意散乱

『中辺分別論積疏』 MAVT 214.17–216.11.

略号および参考文献一覧

BK-I	Bauddhakośa I, See 斎藤ほか [2011] .
BK-II	Bauddhakośa II, See 斎藤ほか [2014] .
BK-III	Bauddhakośa III, See 榎本ほか [2014] .
BK-IV	Bauddhakośa IV, See 宮崎ほか [2017] .
BK-V	Bauddhakośa V, See 室寺ほか [2017] .
BK-VI	Bauddhakośa VI, See Saito et al. [2018] .
Ch.	Chinese translation
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
em.	emended
Gokhale	ゴーカレー本, See AS.
ins.	insert(s)
Ms	Manuscript
om.	omitted in
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
Pradhan	ブラダン本 (一部還梵) , See AS.
T	大正新脩大蔵経
Tatia	タティア本, See ASBh.
Tib.	Tibetan translation
佐久間	対タティア本コリゲンダ, See 佐久間 [1996] .
早島	早島本 (『インド大乘仏教瑜伽行唯識学派における聖典継承と教義解釈の研究』) , See AS.
卅統	新纂大日本統蔵経 (卅統蔵経)

一次資料

梵文

AKBh	<i>Abhidharmakośa-bhāṣya</i> . Ed. by P. Pradhan, <i>Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu</i> , Tibetan Sanskrit Works Series 8, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
AS(-Ms)	<i>Abhidharmasamuccaya</i> . Ed. by V. V. Gokhale, “Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga,” <i>Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society</i> , New Series Vol. 23, 1947, pp. 13–38. 早島 理 『インド大乘仏教瑜伽行唯識学派における聖典継承と教義解釈の研究』, 平成 13 年度～平成 14 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) (課題番号: 13610019) 研究報告書, 2003.

- Cf. ed. by P. Pradhan, *Abhidharma Samuccaya of Asanga*, Visva-Bharati Studies 12, Santiniketan: Visva-Bharati, 1950.
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2013] [2014] [2015] , Li and Kano [2014] .)
- ASBh(-Ms) *Abhidharmasamuccaya-bhāṣya*. Ed. by Nathmal Tatia, *Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series 17, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1976.
See also AS (早島).
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2015] , 佐久間 [1996] .)
- ASVy(-Ms) *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā*. Tib. D (4054), P (5555).
See also AS (早島).
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2015] , Li and Kano [2014] .)
- MAV *Madhyāntavibhāga*. See MAVBh.
- MAVBh *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*. Ed. by Gadjin M. Nagao, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya: A Buddhist Philosophical Treatise Edited for the First Time from a Sanskrit Manuscript*, Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1964.
- MAVṬ *Madhyāntavibhāga-ṭīkā*. Ed. by Susumu Yamaguchi, *Madhyāntavibhāga-ṭīkā: Exposition systématique du Yogācāravijñaptivāda*, Nagoya: Librairie Hajinkaku, 1934 (repr. Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1966).
- PSk *Pañcaskandhaka*. Ed. by Li Xuezhong and Ernst Steinkellner with a contribution by Toru Tomabechi, *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*, Beijing: China Tibetology Publishing house; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2008.
- PSkV *Pañcaskandhaka-vibhāṣā*. Ed. by Jowita Kramer, *Sthiramati's Pañcaskandhakavibhāṣā*, Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2013.
- SNS *Samdhinirmocanasūtra*. Ed. by Étienne Lamotte, *Samdhinirmocana Sūtra: L'explication des mystères*, Bureaux du Recueil, Bibliothèque de l'Université et Paris, Librairie d'Amérique et d'Orient, Louvain: Adrien Maisonneuve, 1935.
- TrBh *Triṃśikā-bhāṣya*. Ed. by Sylvain Lévi, *Vijñaptimātratāsiddhi : deux traités de Vasubandhu : Viṃśatikā (La vingtaine) accompagnée d'une explication en prose et Triṃśikā (La trentaine) avec le commentaire de Sthiramati*, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion, 1925.
Ed. by Hartmut Buescher, *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2007.

- YBh *Yogācārabhūmi.*
- ManoBh *Manobhūmi.* Ed. by Vidhushekhara Bhattacharya, *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga: the Sanskrit text compared with the Tibetan version*, part 1, Calcutta: The University of Calcutta, 1957, pp. 11–72.
- ŚrutBh_h *The hetuvidyā section in the Śrutamayī bhūmiḥ.* 矢板 秀臣『仏教知識論の原典研究 — 瑜伽論因明, ダルモッタラティッパナカ, タルカラハスヤ—』モノグラフ・シリーズ IV, 成田山新勝寺, 2005, pp. 95–124 (tr. pp. 22–41). (「瑜伽論の因明: 梵文テキストと和訳」『仏教文化史論集』2 (『成田山仏教研究所紀要』15), 1992, pp. 505–576 の加筆修正版) .
- ŚrBh_{1,2} *The 1st or the 2nd yogasthāna in the Śrāvakabhūmi.* 1 = 声聞地研究会『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処 — サンスクリット語テキストと和訳—』大正大学総合佛教研究所研究叢書 第4巻, 山喜房佛書林, 1998. 2 = 声聞地研究会『瑜伽論 声聞地 第二瑜伽処 付 非三摩呬多地・聞所成地・思所成地 — サンスクリット語テキストと和訳—』大正大学総合佛教研究所研究叢書 第18巻, 山喜房佛書林, 2007.

漢訳

- 『深密解脱経』 『深密解脱経』 菩提流支訳. T [16] (675).
- 『解深密経』 『解深密経』 玄奘訳. T [16] (676).
- 『法蘊足論』 『阿毘達磨法蘊足論』 尊者大目乾連造, 玄奘訳. T [26] (1537).
- 『順正理論』 『阿毘達磨順正理論』 尊者衆賢造, 玄奘訳. T [29] (1562).
- 『瑜伽論』 『瑜伽師地論』 弥勒菩薩説, 玄奘訳. T [30] (1579).
- 『摂論釈』 『摂大乘論釈』 世親菩薩造, 真谛訳. T [31] (1595).
- 『顕揚論』 『顕揚聖教論』 無着菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1603).
- 『集論』 『大乘阿毘達磨集論』 無着菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1605).
- 『雜集論』 『大乘阿毘達磨雜集論』 安慧菩薩糅, 玄奘訳. T [31] (1606).
- 『六門教授論』 『六門教授習定論』 無着菩薩本, 世親菩薩訳, 義浄制訳. T [31] (1607).
- 『雜集論述記』 『大乘阿毘達磨雜集論述記』 窺基撰. 卅統 [48] (796).

二次資料 (欧文)

Li, Xuezhong 李 学竹

- [2013] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 1, 15, 18, 23, 24—,” *Annual Report The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* (= ARIRIAB) Vol. XVI, pp. 241–253.
- [2014] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 29, 33, 39, 43, 44—,” ARIRIAB Vol. XVII, pp. 195–205.
- [2015] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā* —Folios 2v4–8v4—,” ARIRIAB Vol. XVIII, pp. 275–283.
- [2016] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā* —Folios 8v4–18r1—,” ARIRIAB Vol. XIX, pp. 217–231.

Li, Xuezhong 李 学竹 and Kano, Kazuo 加納 和雄

- [2014] “Restoration of Sanskrit text in missing leaves (fols. 2, 6, 7) of the *Abhidharmasamuccaya* manuscript on the basis of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* manuscript,” *China Tibetology* 23, pp. 53–63.

Saito, Akira 斎藤 明 et al.

- [2018] *The Seventy-five Elements (dharma) of Sarvāstivāda in the Abhidharmakośa-bhāṣya and Related Works VI, Baudhakośa: A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences, Volume 6*, Studia philologica Buddhica Monograph Series Vol. XXXVII, Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies of The International College for Postgraduate Buddhist Studies.

(和文)

阿毘達磨集論研究会

- [2015] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(1)」『インド学チベット学研究』19, pp. 57–96.
- [2016] 「梵文和訳『阿毘達磨雜集論』—安慧による冒頭偈—」『インド学チベット学研究』20, pp. 24–52.
- [2017] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(2)」『インド学チベット学研究』21, pp. 55–86.
- [2018] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(3)」『インド学チベット学研究』22, pp. 27–57.

榎本 文雄 ほか

- [2014] 『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語 —仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— パウツダコーシャ III』インド学仏教学叢書 17, 山喜房佛書林.

斎藤 明 ほか

- [2011] 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集 — 仏教用語の用例集（パウツダコーシャ）および現代基準訳語集 1—』インド学仏教学叢書 14, 山喜房佛書林.
- [2014] 『瑜伽行派の五位百法 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— パウツダコーシャ II』インド学仏教学叢書 16, 山喜房佛書林.

佐久間 秀範

- [1996] 『タティア校訂版『阿毘達磨雜集論』梵語索引およびコリゲンダ』山喜房佛書林.

本庄 良文

- [2014] 『俱舍論註ウパーイカーの研究』（上・下）大蔵出版.

宮崎 泉 ほか

- [2017] 『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— パウツダコーシャ IV』インド学仏教学叢書 20, 山喜房佛書林.

室寺 義仁 ほか

- [2017] 『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— パウツダコーシャ V』インド学仏教学叢書 21, 山喜房佛書林.

Annotated Japanese Translation of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* (4)

Summary

This paper is a continuation of “Annotated Japanese Translation of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* (3)”, which intends to revise the Sanskrit texts of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya*, and to make a Japanese translation of them.

This paper gives translation to a part of the establishment (*vyavasthiti*) of the *saṃskāra-skandha* in the first *tridharma* chapter of the first part, i.e., the *maula* part. This part enumerates and defines the mental elements (*caitasika-dharma*) in terms of their characteristics (*lakṣaṇa*) and functions (*karman*). These mental elements include twenty subsidiary defilements (*upakleśa*) such as irritation (*krodha*) and four undetermined mental elements (*anīyata*) such as drowsiness (*middha*).

The translation was done by Abhidharmasamuccaya Study Group: Yoshihiko Nasu prepared a working translation and annotations, then Kazuo Kano and all other members examined and revised them. Li Xuezhong gave us a full cooperation in editing and revising the Sanskrit texts included in this paper.

- Leader: Yoshihiko Nasu (Social Welfare Corporation Kongojushinkai)
 Members: Kazuo Kano (Komazawa University)
 Li Xuezhong (China Tibetology Research Center)
 Akira Yoshida (Ryukoku University)
 Shun'ei Matsushita (Otani University)
 Satoshi Hayashima (Ryukoku University)
 Takeshi Yokoyama (JSPS Research Fellow)
 Yuki Takatsukasa (Kyoto University)
 Mitsuru Kenchu (Ryukoku University)
 Takanori Fukita (Bukkyo University)
 Hironori Tanaka (Bukkyo University)
 Minori Okuno (Ryukoku University)
 Keiki Nakayama (JSPS Research Fellow, DC2)

(Synopsis)

- 1.1.5.1.4.1.31 *krodha*
- 1.1.5.1.4.1.32 *upanāha*
- 1.1.5.1.4.1.33 *mraṁśa*
- 1.1.5.1.4.1.34 *pradāśa*
- 1.1.5.1.4.1.35 *īrṣyā*
- 1.1.5.1.4.1.36 *mātsarya*
- 1.1.5.1.4.1.37 *māyā*

- 1.1.5.1.4.1.38 *śāṭhya*
- 1.1.5.1.4.1.39 *mada*
- 1.1.5.1.4.1.40 *vihimsā*
- 1.1.5.1.4.1.41 *āhrīkya*
- 1.1.5.1.4.1.42 *anapatrāpya*
- 1.1.5.1.4.1.43 *styāna*
- 1.1.5.1.4.1.44 *auddhatya*
- 1.1.5.1.4.1.45 *āśraddhya*
- 1.1.5.1.4.1.46 *kausīdya*
- 1.1.5.1.4.1.47 *pramāda*
- 1.1.5.1.4.1.48 *muṣitasmr̥titā*
- 1.1.5.1.4.1.49 *asamprajanya*
- 1.1.5.1.4.1.50 *vikṣepa*
- 1.1.5.1.4.1.50.1 *svabhāvavikṣepa*
- 1.1.5.1.4.1.50.2 *bahirdhāvīkṣepa*
- 1.1.5.1.4.1.50.3 *adhyātmavikṣepa*
- 1.1.5.1.4.1.50.4 *nimittavikṣepa*
- 1.1.5.1.4.1.50.5 *daṣṭhulyavikṣepa*
- 1.1.5.1.4.1.50.6 *manasikāravikṣepa*
- 1.1.5.1.4.1.50.7 The function (*karman*) of *vikṣepa*
- 1.1.5.1.4.1.51 *middha*
- 1.1.5.1.4.1.52 *kaukr̥tya*
- 1.1.5.1.4.1.53 *vitarka*
- 1.1.5.1.4.1.54 *vicāra*
- 1.1.5.1.4.1.55 The function (*karman*) of both *vitarka* and *vicāra*
- 1.1.5.1.4.1.56 The function (*karman*) of *kuśala-dharma* and that of *kleśa-upakleśa*

キーワード *Abhidharmasamuccaya*、『阿毘達磨集論』、『阿毘達磨雜集論』、無着、安慧